黒羽芭蕉の館だより4

いて紹介していきます。の館の催し物や収蔵・展示資料などにつこのコーナーでは、毎月一回、黒羽芭蕉

接したからとも考えられています。

ることになりますが、そのきっかけは しています。このあと芭蕉は旅に生き

所不住を旨とする仏頂の生き方に

鹿島根本寺住職仏頂禅師

に参禅

松尾芭蕉の生涯



号の 本名を宗房といいます。「芭蕉」は俳松尾与左衛門の二男として誕生し、国上野赤坂(今の三重県伊賀市内)で になりました。 す。若いころに地元の藤堂新七郎家 (五千石) の嫡子良忠 (俳号・蝉吟) 芭蕉 一つですが、 彼の影響で俳諧に親しむこと は正保元年 最も有名なもので 16 4 4 伊賀 に

ますが、 の水道工 ります。このあと江戸に下り、 社に奉納し、 として は『貝おほひ』という作品を故郷の神 寛文12年(1672)、22歳の芭蕉 かし 延宝8年(1680 本立ちしました。 事関係の仕事なども経験 これがデビュー 35歳ごろに俳諧の宗匠 37 小石川 作とな 歳

深川 で 庵を結ぶ 芭蕉翁像(日原公大氏作)

なりま

当

ことに かな日本橋を離れ、 の時に新たな句境の模索のため華や

ているのです 問い合わせ

滞川川時、

庵のに臨沈深

黒羽芭蕉の館 (54)4151

の小文』『更科紀ケッニ、ハーコー・までに『野ざらし紀行』『鹿島詣』『笈までに『野ざらし紀行』『鹿島詣』『笈は、40歳代半ば 門人曾良との『おくのほそ道』の旅が することとなったのです。 て元禄2年(1689)、 まとめられる旅をしています。そし す。永遠に変わらないものと、 行」という言葉を使うように すなわち芭蕉は、 の旅を通して、芭蕉は「不易流 その途中で黒羽に二週間滞在 41歳の秋から旅 46歳の時に になりま

の作風を模索します。「軽み」とは作 らく上方を旅して、 うと考えたのです。 込むことと言われています。 為や観念の過剰を廃し、日常を詠み に帰りました。ここで芭蕉は「軽み」 『おくのほそ道』の旅の 元禄7年(1694)10月、 久しぶりに江戸 あと、 芭蕉は しば

もに移ろうものを俳諧の中で束ねよ

詠んだ句は983句確認されておれ死去しました(享年51歳)。生涯で 作品の数々は永遠の輝きを放

市内で作られた作品とその作者

倒

最後の旅の中で大坂において病に





このコーナーは、「那須野が 原国際彫刻シンポジウム」で 公開制作、設置された作品と その作者を連載で紹介します。

ふれあいの丘の芝生広場の東端に並ぶ彫刻群 の中の1つです。

少年時代、 "自然"を遊び場にしていた作者 は、"森"に特別な魅力を感じていました。森は



森のうたー若葉のころ 直久 (栃木県) 1997年

四季を通じて いろいろな感 覚を覚え、体 験した場所で した。

ところが、 年を重ねるた びに、次第に その森との距 離は離れ、今 では遠くから 眺めることが ほとんどとな りました。そ れでも、時折



森に足を踏み入れ れば、そこは「少 年だった頃の思い 出が甦って来る」 ところであり、 「いつ帰っても、 懐かしさと共に夢 や希望を与えてく

れる場所」なのだそうです。

作者は「そんな思いを作品を見てくれた人が 少しでも感じ、だれもが持っている少年、少女 時代の日々を思い出してくれたら」という思い

をこの作品に刻み込ん でいます。

作者は本県出身の飯 村直久氏。1995年の 「国民文化祭とちぎ '95 | では文部大臣奨 励賞を受賞。現在は栃 木県立美術館に勤務し ながら、精力的に作品 を作り続けています。

設置場所案内図(★印)



■問い合わせ

文化振興課文化振興係 ■(23)8718